

まえがき

生命科学分野の論文で使われる英語はそれほど難しいものではないが、そこには小説や映画で使われる英語とは異なる特有の言い回しが多く含まれている。そのため論文を執筆するためには、論文でよく使われる単語や表現法に習熟することがとりわけ大切である。昨年出版した『ライフサイエンス英語類語使い分け辞典』は、このようなときに書きたい内容に最適な単語を類語のなかから見つけ出すためのものであった。さらに、個々の単語の使い方については、『ライフサイエンス英語表現使い分け辞典』に詳しくまとめている。この2冊を駆使すれば、論文を執筆するために必要な情報の多くを得ることができる。

しかし、これらをうまく使いこなすためには、やはりある程度の文法力、特に、単語の用法についての理解が必要とされる。そこで、論文執筆において重要な英文法上のルールをまとめたものが本書である。英語論文を書くうえで英文法の知識は必須のものであるが、高校時代に習った英文法のすべてを覚えておかなければならないわけではない。論文執筆のためには、論文で使われるルールだけがわかれば十分であろう。

例えば involve は、科学論文で非常によく使われる単語である。involved in の用例が多く、be involved in (～に関与する) の形で覚えておくことが肝要であろう。しかし、これはイディオムといえるほど結び付きが強いものではない。consist of や account for なら立派なイディオムだが、involve は他動詞でもあり、involved in がそれほど特別なものとはいえないであろう。このような動詞(過去分詞) + 前置詞は熟語として理解するよりも、その文法的な成り立ちを学ぶことが重要である。特に科学論文では受動態の用例が非常に多く、その大部分がSVOの文型の受動態である。そして動詞(過去分詞)のあとには前置詞句が続くことが非常に多い。そこで、これらの前置詞句の役割について文法的に説明できることが必要ではないだろうか。SVOの受動

態の文の骨格は、主語 + be 動詞 + 過去分詞という非常に単純なものである。しかし、実際にはそれらの主要な構成要素は、多くの副詞句や形容詞句によって修飾されている。それらがどのような修飾関係を持ち、また、どのように配置されるかということを体系的に理解し、論文執筆に生かすことが本書の目的である。

論文を書きながら一般の辞書や参考書を調べてみても、通常は単語を入れ替えるだけで通用するような例文はなかなかみつからない。また、意味や内容が異なるために、適用すべき英文法のルールがよくわからないことも多い。そこで、実際に論文でどのような単語がどのように用いられるかを、解析して検討することが必要である。本書の執筆にあたっては、PubMed 論文抄録の英文を調査研究して、論文を書くために必要な文法・用法をその使われる頻度をもとに抽出した。本書ではその情報をもとに、論文によく用いられる文法上のルールを分類して示している。ここには論文で頻出する単語を多数取り上げて、その共起表現（連語表現）を頻度情報とともに示してあるので、どのような表現がトレンドであるかも知ることができる。本書を一度通読し、さらに論文を執筆する際に参照していただければ大いに役に立つはずである。本書が、論文作成の一助になることを願ってやまない。

2007年11月

編著者を代表して
河本 健